

# マーシャル経済学の進化論的特徴について

岩 下 伸 朗

## 目 次

1. 問題の所在 —— マーシャルの二面性
2. 「進化論」にたいする認識と受容視角  
——「適者生存の法則」の理解
3. 進化論的力学アプローチ  
——生物学的方法と均衡分析の連関
4. 進化論的視角の展開  
——「有機的成長」と歴史認識
5. 一応の整理

## 1. 問題の所在 —— マーシャルの二面性

経済学において「新古典派」という呼称は、ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) がマーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) の経済学を特徴付けて使い始めたものという。この呼称は、現在では、数理的思考にもとづき市場の調整機能の調和性を探究したワルラス (Leon Walras, 1834-1910) の体系をコアとして重視する現代経済理論に対して用いられている。マーシャルも、この主流派経済理論にたいして多くの分析概念やツール<sup>1)</sup>を提供した1人として今尚、「新古典派」に列せられてはいる。ただしそこでは、ワルラスの「一般均衡分析」にたいする「部分均衡分析」として、純粹理論的には、やや消極的に位置付けられているようでもある。<sup>2)</sup>

こうした特徴付けとは別に、また、マーシャル経済学は、「進化論的」あるいは「進化経済学」の特徴をもっているとの指摘も、しばしばなされてきた。近年興隆をみせている各国の進化経済学会においても、マーシャルは「進化経済学者」としてリスト・アップされている<sup>3)</sup>。では、「進化経済学」とはどのようなものか、といえ、それに対する理解は千差万別であり、かならずしも明確で確固とした共通理解や認識が存在しているわけではないようである。ただ、その緩やかで大まかな共通性として確認されているのは、経済理論展開において歴史的視角や認識を重視し、経済社会の論理を単に「均衡」とい

う物理学的アナロジーに基づき、需給均衡の力学的概念にもっぱら依存し、社会経済諸現象を認識・把握していく立場 (つまりは現代「新古典派」的立場) を相対化、あるいは拒否するスタンスをもっているということである。確かにマーシャルは歴史的認識に多くの叙述を割いているし、また自ら提起している均衡論自体を絶対視してはいない経済学者であった。

彼が、単に力学的均衡論の精緻化をすすめた経済学者ではなく、生物学的発想をもって理論展開をなそうとしていたことは、しばしば言及される、『経済学原理』第5版 (1908年) 序論での次の叙述によく示されていた。「経済学者のメッカは経済(動)力学(dynamics)によりも、むしろ『経済生物学(economic biology)』にある。しかし、生物学的諸概念は力学的諸概念よりも複雑である。それゆえ基礎編では力学的類推に比較的多くの場所が与えられなくてはならない。『均衡』という用語がしばしば使用されるが、この用語は、なにか静態的な類推を連想させるものである。この事実は、本書においては現代生活の通常の状態に主な注意が払われていることとあいまって、その中心的な観念が『動態的』というよりもむしろ『静態的』であるとの印象をあたえてしまった。しかし実際には、本書は一貫して、運動を引き起こす諸力に関心をおいているのであり、その基調は静(力)学というよりもむしろ動(力)学なのである。<sup>4)</sup>この『原理』に対する誤解の指摘は、自分の提起した概念や思考がその本来の意図を理解されずに一人歩き始めていることに対する懸念の表明でもある。マーシャルにとって、あくまで「経済学は、生物学と同じく外的な形態のみならず内的な性質と構造が絶えず変化しつづける問題を取り扱う」(Principles, p.772) ものでなければならなかった。

マーシャルが経済学を「経済生物学」として展開しようと発想した背景には、19世紀中期以降、ヨーロッパの宗教、科学思想界に多大の衝撃を与えたダーウィンの「生物進化論」の影響があり、それに相応した「社会有機体」観や「進歩」思想の諸展開<sup>5)</sup>があった。これらの諸思想のマーシャルへの影響はしばしば指摘され、その進化論的特徴や進歩観についても言及されてはきた。しかし、

1) 「価格弾力性」「外部・内部経済」「短期・長期」「準地代」などである。

2) こうした視角からマーシャルを過小評価する代表者サミュエルソンは、マーシャルの需給分析をして、「一般均衡」体系のなかの「部分均衡」分析という単純な事例にすぎない、との位置付けに終始している。P.A. Samuelson, 'Economists and the History of Ideas', *The American Economic Review*, Vol.52, 1962.

3) 「進化経済学」の状況やその学会については、『進化経済学とはなにか』(進化経済学会編、有斐閣、1998年)を参照。

4) *Principles of Economics*, 1890, 9th Guillebaud ed., 2 vols. Macmillan, 1965, p. xiv. 以下、引用はこの版による。永澤越郎訳『経済学原理』[岩波ブックセンター信山社、1985年]訳文にはしたがっていない。邦訳書には、この版のページも付されているので邦訳書頁は省略する。以下本文では『原理』と表記する。

彼自身の「進化論」にたいするより具体的な認識やそれと彼の経済理論体系展開との相関性や緊張関係については、これまで必ずしも明確に論じられてはいないように思われる。

マーシャルは、進化論自体をめぐるある程度まとまった具体的言及を『原理』や『産業と交易』(Industry and Trade, Macmillan, 1919年、永澤越郎訳『産業と商業』(岩波ブックセンター信山社、1985年)本論では『産業と交易』との訳語をとりたい。以下引用はITと略記する。)に残している。本論では、それらの叙述を手掛かりとして、「進化論」にたいする彼の基本認識を再確認し、さらに、その認識が、彼の経済学体系展開をいかに規定しているのかを考察してみたい。この確認はまた、彼が二面的に捉えられてきたことの理由を説明するようにも思われる。

## 2. 「進化論」にたいする認識と受容視角 —「適者生存の法則」の理解

マーシャルは『原理』第2編「基本的諸概念」序章で、次のように述べていた。「経済学者には最近の生物学の経験から学ぶべき多くのものがある。ダーヴィンのこの

---

5) マーシャルが経済学研究に着手した1860年代は、ダーヴィン(Charles Darwin, 1809-82)の『種の起源』(On the origin of species by means of natural selection on the preservation of favoured races in the struggle for life, 1859)を最大のインパクトとした生物進化論の提起とそれに相応した社会進化論が欧米社会に大きな衝撃と波紋とを引き起こしていた時代である。とくにスペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)は「進歩」という現象の客観的構造を「分化」と「総合」の漸進的進展ととらえ、単純同質なものが異質で複雑なものへと進展していく形式に注目し、これをすべての事象捕捉の一貫した論理として、生物進化から心理学・社会学へと連なる壮大な哲学社会思想体系を構築し、「社会有機体」観にもとづく「社会進化論」を展開していた。また、ケンブリッジの法学者ヘンリー・メイン(Henry Maine, 1822-88)は、ローマ法とイギリス慣習法との比較検討をとおして「慣習」の社会や経済への影響を重視し、これを法制度の進化ととらえて、あらたな法学の思考を展開し始めていた。マーシャル自身、ユニバーシティ・カレッジ時代に、スペンサーの『第一原理』、『社会静学』やメインの『古代法』などを活用した講義を行っている。また、『原理』初版(1890年)序文には、形式的側面でのクールノーやフォン・チューネンの影響とともに、見解の実質的内容への影響の点ではスペンサーやヘーゲルが大きかったと回想されている。こうした様々な影響の中、マーシャルは、経済学をミル(J.S. Mill, 1806-73)の『経済学原理』に接することで本格的に開始したこともあって、ミルの現代版化が彼の構想であった。ここで、マーシャルはコント(Auguste Comte, 1798-1857)やスペンサーの「社会有機体説」に共感を示しつつも、彼らが提唱した総合社会学の構想は、その社会認識の科学的基準が希薄だと考えた。「社会における人間行為の全領域はあまりにもひろくかつ多様であって、単一の知的努力によって分析し、説明することは不可能である。コント自身とハーバード・スペンサーは、比類ない知恵とすぐれた才能をもってこの仕事に取り組み、広範囲に及ぶ展望と教えるところの多い示唆によって一時期を画した。しかしそれによって統一的な社会科学の建設が開始されたということさえできない」(Principles, p. 770)としていた。社会は複雑な諸要素が相互に絡み合う有機的な全体であるとの認識を受容したうえで、マーシャルは、「貨幣的動機」において、人間行動を量的に把握していく経済学は、社会有機体の基本的側面を分析するうえで、有効かつ現実的な「部分分析」となると考えていた。

問題に関する深遠な議論は、私たちの前にあるその困難さに強力な光を投げかけているのである。彼は、生活の習慣や、自然界でそれぞれが占めている一般的な場所を規定している構造の部分は、原則として、その起源に最大の光を投じている部分ではなく、むしろ最もわずかな光しか投じてはいない部分である、と指摘している。飼育家や園芸家が、動物や植物がその環境で繁栄するように明確に適応していると気付くところの性質は、まさにこうした理由から比較的最近に発達してきたもののである。]<sup>6)</sup>ダーヴィンが『種の起源』で示した人為選択・自然選択の含意として、マーシャルは、まず環境の変化に対して歴史的経路においては「比較的最近」になされた「選択」結果が現在の種の性質を規定しているとの把握を重視している。マーシャルは、同様の論理が人間社会の歴史展開をささえてきた社会諸制度にも同様に当てはまると考えて「同じようにある経済制度のもつ諸特質の内、今日において果たすべき仕事にその制度を適合させるのにもっとも重要な役割を演じているのは、まさにこうした理由からかなりの程度最近の展開によるものである。」(Principles, p. 50)と続けていた。

「進化論」の論理をめぐるより具体的な叙述は、『原理』の第4編「生産要因」第8章「産業組織」と、さらに『産業と交易』の第1編第9章「産業と交易の現在における諸問題の移行」に示されている。いずれも時代の生産力構造を「企業組織」や「産業組織」の有機的關係において、分析しているところである。

『原理』第4編は「産業組織」を重視するマーシャルの新たな知見が展開されているところである。そこでも、彼は次のように述べて分析を開始していた。「人間の生存競争に関するマルサスの歴史的な説明が、ダーヴィンに動植物界における生存競争の諸結果の研究に着手させた。ダーヴィンの研究は、生存競争によって絶えず演じられる選択の影響の発見となった。その時以来、生物学はその負債を返済するにとどまっていなかった。今度は経済学者たちが、一方の社会組織とくに産業組織と、他方の高等な動物の身体的組織との間に発見された多くの類似性に、多くの恩恵を受けている。」と。彼は、スペンサーの諸著作やドイツの生物学者ヘッケル(Ernst Haeckel, 1834-1919)らへの参照を求めながら、「産業組織」と「動物の身体組織」とに関して、双方ともに「その発展につれて、一方においては個々の部分の間における機能の分割が増大し、他方においてはそれら個々の部分間の緊密な結合が進展している」ことにその類似性があると確認している。様々な機能の分割と結合とが「有機体」進化の「一般的原则」であった。(Principles, pp. 240-1)

そのうえで、マーシャルは「産業に関して言えば、機能のこのような分割の増大、いわゆる『分化』は、分業および特化された熟練、知識、機械の発展という形をとっ

---

6) ここで、マーシャルは『種の起源』第14章(最終章「要約と結論」)への参照を求めている。

ているし、また『総合』、つまり産業有機体における各部分間の結合の緊密さや堅固さの増大は、商業上の信頼の安全性が増大し、また、海陸交通路、鉄道、電信、郵便、印刷機などのコミュニケーション手段が増大しているという形をとっている」(Principles, p.241)との認識を示している。

漸次発展していく分業体制とそこでの労働熟練や知識の発達・普及にもとづく機械化の進展や交通機関の発達がもたらす結合性の高度化によって「収穫逡増」の生産力が実現されている経験的事実が注目されている。ここから、土地、労働、資本に加えて、「組織」が独自の「生産要因」とされていた。「組織」を強調するマーシャルの視点が、客観的歴史展開を見据えつつ、「進化論」的認識に基づいている点にあらためて注目してみたい。

マーシャルは生物有機体とのアナロジーから経済社会把握の着想を学びつつも、「進化論」自体には次のように保留を付してもいる。「最高度に発展している有機体が、生存競争においてもっとも生き延びやすい有機体であるとの学説は、それ自身が発展の過程にある。それは生物的諸関係においても経済的諸関係においてもなお完全に考えぬかれてはいない」(Principles, p.241)ものだと。では、それ自身発展の過程にあるという「生存競争 (struggle for life)」や「適者生存 (survival of the fittest)」あるいは「自然選択 (natural selection)」をめぐる思考について、彼自身は、どのようにとらえていたのだろうか。

マーシャルは、進化論の論理をもっぱら「適者生存」の法則<sup>7)</sup>としてとらえ、その上で次のように論じていた。

「適者生存の法則とは、有機体自身の目的にその環境を利用するのにもっとも適している有機体が生存する傾向がある、ということを示している。環境をもっとも巧みに利用する有機体は、周囲にもっとも利益を与える有機体であることがしばしば明らかではあるが、それらはまたときには有害な存在であることもある。逆にいえば、生存競争は高度に有益であるだろう有機体を存続させそこなうこともある。」(Principles, pp.242-3)ダーウィンが提起した論理は、環境にもっとも適している有機体が結果として生存を確保していく傾向があるとの形式論理であり、環境に適して生存を確保したものが、逆にその外部環境にたいして有益なものであるか否かの視点は、本来この法則には含まれてはいないのであった。

また、『産業と交易』の第1編第9章「産業と交易の現在における諸問題への移行」<sup>8)</sup>では次のように展開され

ていた。「実際、生物学は、遺伝と自然選択が—その親たちや別の年長個体のうまくいった行動を模倣することや、その他の後天的な影響によって補われながら、低級な動物であっても、自らの構造や操作を環境に適応させて、自分自身のために、より容易で、能率的に、また確実に環境を利用できるようになっている多くの事例を今尚発見している。このような適応のほとんどは、ひとつの種に属する各成員がそれぞれ単独に行う機能に関するものである。」(IT p.164)ここでマーシャルは、生物個体が環境に適応しようとする活動をとおして、その形質を変化させていくとの考え方(用不用)と、個体に生ずるアト・ランダムな変異の内、環境に適したものが存続していく(自然選択)との思考との区別によりも、生物進化論の論理が生物個体の独立した適応におかれている点をむしろ重要視している。

ここから、マーシャルはつぎのように論じていた。生物界においても、「適応の重要な部分には、ひとつの集団に属するさまざまなメンバーたちの軍事的な組織に関係するところがあるし、また、いまひとつ別のさらに大きな部分は、メンバーたちの企業組織に関係しているものがある。」個体の変異とそれによる環境への適応と並んで相互依存的組織体が適応主体ともなるのである。そしてマーシャルは「蟻塚や蜂の巣は、同じ程度の複雑さと能率を持つ人間の企業組織がみられるようになった期間よりも非常に長い世紀の間にわたり、高度に組織化された企業体であった。」との認識を示すのである。ただ「しかし、蟻や蜂の組織は、われわれの知る限りでは自動的であつた、無意識的であり、予見や入念な工夫によって導かれていることはない。」これに対して「人間の企業組織にはほとんどすべての場合に、目的にたいする手段の意識的な適応という要素が存在している」という違いがあった。人間の社会においては「経済発展の初期段階では、自動的な諸要素が意識的で熟慮された要素を大いに凌駕していたが、しかし、諸条件の変化は、徐々に平穏な調整によって対処されるようになった。初歩的、部分的な分業が、同一家族の個々のメンバー間に、また諸家族の間に、さらには近隣の村落間や氏族間で増大した。そこに企業上の信頼と確信の起源が存在した。」(IT pp.163-4)このようにマーシャルはとらえている。

生物界においても「集団」や種組織を形成している社会的動物が見い出され、その「種族」や生物集団総体を適応主体とする「適者生存」が考えられるのである。蜂や蟻のような組織化された(と思える)社会的動物の群れにはすでに人間社会の組織と同等に扱いうる部分があるというのである。生物界での個体間において形成される諸組織は自動的で無意識的なものである。人間の集団や組織の展開は、生物界での自動的本能的な要素から徐々に「目的にたいする手段の意識的な適応」が発展していくことに依存している。そしてこの「意識的適応」は、産業組織を基礎とする社会での「企業的精神」の原

7) 周知のように、この用語自身はスペンサーが最初に提示したもので、ダーウィンも『種の起源』第5版からこの用語を活用していた。ダーウィン自身の「自然選択」の視点がいわば環境の視点だとすれば、「適者生存」は、有機体を形成する主体の視点に力点がある表現だといえるだろう。

8) この章では、人間の歴史を「経済的進化」の視点でとらえ、その「主要な特徴の一つは、生活の実務において、『企業的精神』が漸次出現してきたことである。」(IT, p.163)との観点から現在の産業組織の問題の起源が探られている。

型なのであり、その発展が自ずと社会有機体発展の原動力となるに他ならない、このようにマーシャルは考えている。

ところで、またマーシャルによれば、以上のような「適者生存の法則」に関して、これまでこれを「世界に貢献するのに最も適したものを自然は競争を通じて生存させる傾向」のことでありと把える誤解がしばしばみられたという。これは生物進化論が提示した基礎論理からすれば明らかに誤解である。にもかかわらず彼は、「一般的にいだかれているこうした見解は、形式において誤っているほどには、実質においてはけっして誤っていないわけではない。」と言う。なぜならば、たとえば、巧みに組織的な群を形成することによって獲物の捕獲にすぐれている狼の種族は生存し続けていくであろうし、あるいは「ある種族の人間が獲得した力の増加はどれも、生活の必需品や安楽品を獲得する際の困難を克服したり、あるいはその人間の敵に打ち勝ったり、ないしはその双方を可能にするところの社会的な性質に依存している」のであり、とくに「意識的な適応」が十全化した社会有機体においては外部への貢献に適した主体存在の重要性は確かだからである。(IT, p.175-6)

一種族や産業組織や企業組織といった社会有機体相互間での「生存競争」は、生物個体間での自動的排他的なそれとは異なり、その各成員の社会的な性質、とりわけその「利他的犠牲的」特性の存在とその程度とが、結果としてその有機体（たとえば種族）全体の存続の契機となっていくのである<sup>9)</sup>。

この「利他的犠牲的」特性の展開について、マーシャルはさらにこう論じている。「理性と言語をもつ人間となれば、種族を強化しようというある種族の義務感の影響は、やや異なった形をとっている。人間生活のより未開な段階では個々人がその他の者に行う奉仕の多くは、蜂や蟻の場合とほとんど同じく、遺伝的習性や非理性的衝動によるものである」。しかし「低級な動物にその萌芽があるような非理性的共感徐々にその範囲を拡大し、行動の基礎として慎重に採用されるようになる。つまり、種族的な愛着は、狼の団や強盗集団において支配的なものとほとんど変わらない水準から出発して、段々と顕著な愛国心にまで成長する。」(Principles, p. 243) と。

マーシャルが家族集団を重視し、人種の違いを意識した叙述をみせるのも以上のような認識にもとづいているといえそうである。いずれにせよ、「生存競争は、長期

的には、個々人が自分のまわりの人々のために喜んで自分自身を犠牲にするような人々の種族を生存させていくのである。なぜなら、その種族は結果として自らの環境を利用するのに集団として最適に適応している」(Principles, p. 243) からである。こうした視点から、マーシャルは、社会有機体の生存の契機を「他者への配慮と自尊心」にもとづく「人間の進歩 (human progress)」(Principles, p. 248) に存している側面を強調していくのである。

以上のような生物進化論の把握とその社会組織への展開を確認してみると、マーシャルの生物学的思考の受容とそれによる経済社会の認識基盤は、少なくとも彼の意識の中では、単にアナロジーとして考えられているだけではない。彼は社会進化の過程を、生物としての人間の身体的進化を含ませつつ<sup>10)</sup>、生物界にもみられる社会組織性の進展を強調し、そうした視角から生物進化と経済社会進化を連続的にとらえようとしている。

こうした進化論の受容視角は『原理』第3編「欲求とその充足」の冒頭に示された人間の欲求と活動との歴史的な関係認識と相関している。人間の欲求は、歴史的にみると生命維持的物質的欲求から精神的欲求へと、つまり物質的欲求が歴史の進展を通して多様化し、その「多様性に対する欲求」を介して精神的な「差別化の欲求」へと展開してきた。このように欲求の進化を整理する一方で、マーシャルは「人間の発展のもっとも初期の段階において人間の行動を喚起するものは人間の欲求であったが、のちの新たな上昇運動の各段階においては、新たな欲求が新たな活動を喚起するよりは、新たな活動の発展が新たな欲求を喚起する方向に作用する」(Principles, p. 89) と指摘し、いわば、環境への受動的結果的な適応ではなく、人間の活動が歴史を牽引し、環境を作り変えていく適応調整の過程に他ならないとの認識を示していた。初期の生物としての特性がなお強かった段階では、その進化過程も生物的な制約に従っていたが、人間が能動的に活動を遂行し、それによって社会を進展させていくようになると、生物世界で圧倒的であるような「生存競争」だけでは歴史は説明されないのであった。

以上のようにその「進化論」受容をみると、マーシャルが、数理的（あるいは限界分析的）手法にのみ依存するような「新古典派」理論の思考とは、大きく異なるスタンスに立っていることは改めて強調する必要もなかろう。ただ、興味深いことには、マーシャルにとっては、進化論的視角と数理的視角とは、矛盾するものでもなかった。「進化論的」な思考と限界分析的数理的思考

9) マーシャルはこの点での生物界の事例と絡めて次のように述べている。「ある種の昆虫とその昆虫が蜜を集める花々は、「自然選択」の助けによって相互に相手を変化させ、その結果昆虫は、花に受精を行う絶えまない働きによって、自らも豊富な食料を確保するようになる。同様に、自分自身の力を発展させるのに環境を最大に利用する能力がある諸制度が生き残る傾向があることは確かである。しかし、その制度が、お返しに環境に利益を与えるかぎりにおいて、それ自身の力の基礎を強化し、またそれによって、自らの共存と繁栄の機会を増大させていることも確かである。」(IT, p. 176)

10) スペンサーに言及しつつ、次のようにとらえている。「なんらかの肉体的ないしは知的な活動が人間に喜びをあたえ、頻繁に繰り返されるならば、そのような活動において用いられる肉体的ないしは精神的な器官が、急速に成長する傾向がある。」(Principles, p. 247) これはダーウィンに先行した進化学説であるラマルクの用不用説的な認識である。実際、ダーウィンとスペンサーも生物の進化は、その比重の違いはあれ、自然選択と用不用を基本とする複合的過程であるとしていたようである。

との関連性に関する注意を引く認識が、『原理』の数学的付録 (note XI) には示されている。生物体の器官の変化＝進化は、連続的な量的変異の漸増的累積がもたらす結果であり、比較的短時間であっても、その変化がいかに急速に現れてくるかは、数学定理(テイラーの定理)によっても確認<sup>11)</sup>できるといのである。マーシャルは、「18世紀の物理学への微分法の応用によってなされた前進と進化論の興隆とのあいだには表面的な関連以上のものがある。」と考へ、「生物学におけるのと同様、社会科学においてわれわれは、最初は弱い、それ自身の効果の増大からますます強力となっていく諸力の効果の蓄積に注目することを学んでいる」としていた<sup>12)</sup> (Principles, p.843)。『原理』第2編に示されていた「最近の影響の大きさ」の認識である。

マーシャルは以上のような「進化論」的視座をもって自らの経済学体系を展開していたのである。これを踏まえて彼の経済学に示されている諸概念や特徴についてあらためて考察してみるのも無駄ではないであろう。それによって、そこに見られる新古典派経済学的要素と進化経済学としてのマーシャル経済学体系との関連と差異も浮き彫りにされてくると思われる。

### 3. 進化論的力学アプローチ

#### ——生物学的方法と均衡分析の関連

マーシャルが自らの経済学展開において、生物進化論

11) ある種の鳥の何羽かが水生の習性をとり始めたならば、自然選択的作用によって徐々にであろうと、突然変異として突然であろうと、つま先のあいだの水かきの段階的増大によって、その鳥たちは、水生生活により有利となっていき、水かきの増大に、より依存した子孫を残していく機会を生み出すであろう。その結果、もしも  $f(t)$  が時間  $t$  での水かきの平均的面積であるとすると、水かきの増大率は (ある制限内において) 水かきが増大していくごとに増大するし、それゆえ、 $f''(t)$  は正となる。さてわれわれは、テイラーの定理によって

$$f(t+h) = f(t) + hf'(t) + \frac{h^2}{1 \cdot 2} f''(t + \theta h)$$

を知っている。そこで、もしも  $h$  がおおきければ  $h^2$  は非常に大きくなるので、 $f(t+h)$  はたえず、 $f'(t)$  が小さく、また  $f''(t)$  が決して大きくないとしても、 $f(t)$  よりも、ずっと大きくなるであろう。(Principles, p.843)

12) この点と関連して『原理』第7版 (1916年) の数学的付録には、メンデル遺伝学への次のような言及が見られる。「テイラーの定理」が示すような「この結論は、たとえ研究が進んで、幾人かのメンデルアンたちがなした、種の漸次的変化は、支配的なタイプから大きく乖離した個体によって生み出されているとの示唆が確認されたとしても、確かなままでであろう。というのは、経済学は人間の、特定の国の、特定の社会階層の研究であるからである。それゆえ、経済学は、例外的な天才や例外的な邪悪さや凶暴さをもつ人間生活にはただ間接的に関係しているだけである。」(Principles, p.884)

歴史的な天才や特異な個人によって社会は影響されるが、長期的全体的に社会を見れば、それは漸次的に変化・進化していくものにちがいない。一部のメンデルリストが社会現象においても主張する突然変異の影響は経済社会では二次的なものだと、考えられている。たとえば、「産業革命」についても「実際そのときに起こったのは革命ではなかった。それはほとんど数百年間中断なく進行してきた進化のほんの一段階にすぎなかった」(IT, p.9) とのべ、歴史においても、一見飛躍と見える変化も、連続的な変化の蓄積の結果にすぎないと、強調されている。

の認識から学んだ「生存競争」の概念が直接的に援用されているのが明快なのは、企業体が、「ライフ・サイクル」を描くものと把握されていることである。現実の個別企業は、その創業時において活力ある企業家とともに誕生し、企業活力を向上させて徐々に成長してゆき、その規模や収益力を徐々に高め、壮年期には、より活発となって、当該産業をリードしていく。しかし、その企業体の中心である企業家個人の活力の衰えや、創業企業家の代替りにもよって、どの企業も、いずれは、その活力を低下させ、老齢期を迎える。活力を失った企業は環境への適応力を失い、生存競争の中で死滅していく運命にある。こうした把握であった。

この企業のライフ・サイクル認識による市場・産業状態を前提として、マーシャルが個別企業と産業総体との関連と差異とを「木と森」とになぞらえつつ、その関係を捕捉していくために提起したのが、「代表的企業 (representative firm) 概念」である<sup>13)</sup>。ある産業 (森) の中にある諸企業 (木々) は、その企業活力に相応した産業内での位相をもちつつ、個別には内部経済の向上を求めて相互に激しい競争を行っている。しかし、この競争過程は、他面では、相互の依存性を向上させながら産業総体を形成・発展させてもいる。各個別企業のライフ・サイクルの様々な位相の相互依存の絡み合いとして一産業が構成されている。その産業全体の動向を代表的に示す平均的な「内部・外部経済」をもっている一種の基準企業としてこの概念は構成されていた。生物個体を一企業体だとすれば、生物個体レベルでは絶えず差異を生みつつ誕生と死滅が繰り返されるが、その新陳代謝をとおして、その種が形成され変化していくとの認識からのアナロジーである。

確かに形式論理上の問題としては、矛盾を含むかもしれない<sup>14)</sup> この「代表的企業」概念は、しかし、進化してやまない現実をマーシャルなりに把握していくための一基準であって、彼が理論のための理論を構築しようとしてはいないことの証左でもある。こうしたマーシャルの方法は、企業と産業との関係を「適応と環境との相互関係」という視角から認識したものに他ならない。つまり、個別企業が、自らの組織化を進展させて、その「内部経済」の向上によって競争する、その社会総体的帰結が「外部経済」の上昇となるという認識である。組織化展開に

13) 拙論「マーシャル経済学と代表的企業概念」『経済学研究』第56巻第3号、九州大学、1990年、参照。

14) 欧米では、この論理構成の妥当性・有効性に関して、様々に検討されてきた。もっとも「新古典派」的な論理整合性の観点からは否定的に見られることが多く、結果としてはミクロ経済理論体系からはこの概念自体は放逐されているようである。これは「均衡」に主眼を置く理論スタンスからすれば、ある意味で当然であろう。この概念構成との関連で、この「新古典派」を否定していくスラフアも、また、産業の収穫逡増 (外部経済) と個別企業 (内部経済) の関係を「代表的企業」で代表させることは論理的に不十分なものとして厳しい批判を提起したこともよく知られている。(P. Sraffa, "The Laws of Returns under Competitive Conditions", *The Economic Journal*, Vol. 36, 1926)

よる競争と共存との進展運動としての産業把握である。彼にとって産業と企業とを連続的に捕捉するために提起した「代表的企業」とは、まさに経済社会における「種」の概念に相応しているといえよう。

『原理』が、その均衡論に焦点が当てられて誤解された事実へのマーシャルの懸念からも分かるように、その力学的方法は生物学的方法の前提であり、基準であった。彼が生物学的方法を目指していた以上、力学的アプローチにも可能な限りで、動的過程や有機的関連を埋め込む工夫を凝らして理論展開しようとしていたはずである。

従来緻密に分析されてきた『原理』第5編「需要、供給および価格の一般的関係」でも、「内部・外部経済」を平均的に享受する「代表的企業」が供給主体と想定され、この企業が行う調整行動がもたらす「正常な均衡価格」の傾向が分析されていた。マーシャル自身の問題の焦点は「均衡点」という帰結ではなく、そのまわりで働く諸力が作用する過程の捕捉にあった。彼にとって「均衡」とは行き着いた先の状態のことではなかった。

これをよく示しているのが「均衡」の傾向をもたらし「代替の原理」に関する次のような重層的思考である。まず「企業家は、その影響の及ぶかぎり、代替の原理の作用にしたがって、おのおのの（生産）要因の使用が、それぞれの限界投入において、それぞれの投入から生ずる追加純生産物がおのおのの費用に比例するように、調整を行う仲介者」（*Principles*, p. 515）である。彼によって「おのおのの用途における要因の価値の間の均等は、その用役が、より少ない価値しか持たない用途からより大きな価値をもつ用途へと、代替の原理によって絶えず移動する傾向によって、維持され」（*Principles*, p. 522）ている。「一般原則として、代替の原理によって、——それは適者生存の法則の特殊な制限された適用でしかない——産業組織のある方法が、いまひとつのより低い価値で直接的で即時のサービスを提供する方式に取って代わられる傾向」がもたらされる。（*Principles*, p. 597）つまり企業活動において、その指揮者である企業家は、産業組織においてさまざまに生じつづける外的環境変化（新しい機械の発明、運輸、通信、交通機関の発達・改良、新たな経営ノウハウ等々）の中から、その企業の存続・発展にとって好ましいと判断したものをいわば「人為選択」していくのである。

そのうえで、その結果が、環境に十全に適応（その評価基準は利益を確保・拡大しつづけ、企業が存続・成長していくことである）できれば、その企業組織、あるいはその企業家は産業＝市場における「自然選択」によっても存続しつづけていくのである。こうした点をマーシャルはこう表現している。「企業家たちはある程度別個の階層である。というのは、代替の原理がある生産要因を他の生産要因とバランスさせるように主に作用するのに対して、企業家たちに関しては、企業家間の競争の

間接的な影響以外には、代替の原理がその作用をもたらすものを持っていないからである。」（*Principles*, p. 663）しかし、それによって「社会は同じような方法で、その費用に対して能率の劣る企業家を別の企業家に代替していく」（*Principles*, p. 341）のである、と。

このようにマーシャルは経済社会における生存競争過程は意識的活動に起点をもちながら、その上で「自然選択」作用が社会的には貫徹していく二重の「代替の原理」の貫徹過程として認識している。マーシャルは、起点に人間（企業家）の意識的活動が存在していることに、社会の動きに働きかける重要な契機をみているのである。

「新古典派」マイクロ理論においては、消費者選択の展開にしる、企業の生産諸要素の選択にせよ、極大・均衡化をうながす論理として「代替の原理」はその帰結を中心に認識されている。マーシャルの場合、この法則は、一定の初期条件のもとで「最適な極大点」に向かわせる基準原理というよりも、条件自体を（つまりは環境を）変化させていく社会「原理」として認識されている。

さて、マーシャルが供給の可変可能性に相応して、一時的・短期・長期という時間区分をもって「均衡」論を展開しているのは周知のところである。その論理展開と密接に関連し、力学的方法と変動過程把握とを媒介させているのが、「準地代（quasi-rent）」概念である<sup>15)</sup>。「準地代」とは、各企業のもつ他の企業に対する相対的優位さが短期においてもたらしめている差額利得であり、この利得はその相対的優位さが競争により時間経過とともに消滅していくのに応じて、長期においては消滅していくものであった。「代表的企業」を想定してこの論理が考えられているとすれば、この「準地代」は耐えざる市場での競争をとおして、ある企業において生じていた「準地代」が消滅していく一方で、他方ではたえず新たな「準地代」が生じているのであり、こうして「代表的企業」にはたえず「準地代」が発生しているのである。これは産業全体の有機的な生産力が発展していることの認識でもあろう。しかも「準地代」が短期に発生して長期には消滅するという認識には、差別的利得のために以前に投下された補足費用（固定的設備費用等）が長期的には回収されなければならないとの論理も含まれていた。弾力的に変化し生じている「準地代」には、長期的な再生産継続の視点を踏まえた生産力向上の起点の問題が組み込まれてもいた。このようにマーシャルは生物学的方法を力学的方法に組み込む工夫を展開していた<sup>16)</sup>。

マーシャルにとって『原理』第5編で展開している力学的論理自体も、あくまで経済成長過程が市場経済において一定の調和的傾向を保っていく基本的枠組みの提示にすぎなかった。確かに彼は均衡自体の分析に終始している経済学者ではなかった。

15) 拙論「A. マーシャルの「準地代」について」『経済論究』第71号、九州大学、1988年、参照。

#### 4. 進化論的視角の展開

##### ——「有機的成長」と歴史確認

均衡分析においても生物学的なアプローチを織り込んでマールの経済学は展開されていた。それを前提として、さらに『原理』第6編「国民分配分の分配」において、「代替の原理の多面的な作用」による「生存競争」の具体的過程の分析がなされている。諸分配範疇の特性が「国民所得」形成に影響する過程を分析していく中で、「経済的進歩」がもたらされる枠組みがここで提示されていく。そこでは、主体と環境との重層的連関がより具体的に考えられて、「環境と適応との相互作用」という進化観が「経済的進歩」と「人間的進歩」との相互連関による「有機的成長」として展開されていくのである。マールはそこで以下のように展開しながら、経済社会の一般的将来展望の骨組みを提示していたのである。

まず、「経済的進歩」を現実的に左右できる「適応」の基本的舞台である企業組織の場をめぐる、均衡把握において提示された「準地代」の論理が高次に展開されて独自の概念となっていた。各個別企業がもつ現実具体的な生産力の根拠は、そのそれぞれの特定な環境（つまり日々年々の市場の状態、その企業が獲得している具体的な生産技術、その企業独自の人的組織等々の、まさに、特定、具体的、個別的、現実的な有機的な結びつき総体）において実現されているものである。マールは、この特定の環境総体がもたらす他企業との差別的特定利得をあらためて「複合的準地代」と認識しなおしている。彼は、この「複合的準地代」を「準地代」とは異なり、基本的再生産の継続の観点から前提とした次元で認識し、この遊離した利得を短期的・現実的に、どう分配していくか、その日々の積み重ねに「経済的進歩」のカギがあると思考しているようである。

「複合的準地代」から分配された所得を各主体は、どのように処理するのか、その使用法がまた「人間的進歩」の問題と不可分であるとみられるのである。マールは利他的行動を含む個々人の「人間的進歩」にもとづく「適応」がなければ「経済的進歩」との循環構造としての「有機的成長」の展開は行きづまざるを得ないと思考している。つまり一方で企業組織に発生する当面の余剰「複合的準地代」を「任意に分配可能」と認識しつつ、他方では、その分配分の使用における人々の消費生活態度が「経済的進歩」に与える影響を重要視していくので

ある。ここから利他的な消費に走っていく「下級な欲望」先行の生活態度を示す「安楽基準 (standard of comfort)」に対して人間資質にも影響する「活動」自体を高度化させるような消費・生活態度である「生活基準 (standard of life)」の向上が強調され、それを引き出すための家庭・教育環境の改善が主張されている。ここでも人間活力は生命的活力とそれを前提とした社会活動における人間関係の活力との累積的活力としてとらえられている。弾力性に富んだ現実の経済発展過程が、こうして、人々の倫理やそれに支えられた「活動」とリンクさせて説明されている。さらに「意識的適応」の産業組織社会での遂行者である「企業家」たちに対してはさらに進んで、「金銭的利得」ではなく、「他者への配慮と自尊心」に基づいて、活動自体に喜びを見出し、その活動に対する社会的評価のみをその対価とできるような「経済騎士道精神」も要請された。

消費生活においては活動向上に結びつくような「生活基準」の向上を求め、またとくに企業家には自らの活動の「社会的評価」自体を重んじ、結果として「利他的」行動によって社会的環境変化に柔軟に対応していく「適応」遂行をマールは求め続ける。「人間的進歩」の源泉である「他者への配慮と自尊心」を経済社会で実践する思考習慣を労働者階級・企業家階級双方に具体的に提示して、彼は社会進歩を展望するのである。

自らの進化論認識にもとづく以上のような展開は、『原理』においては、基本的にその視野が「生産過程」に据えられ、具体的にはイギリスの産業状況が表象されたところで、なされていた。しかし、その認識は、『産業と交易』になると、その視野が「流過程」へと重点を移し、かつ比較産業組織的方法がとられて、より具体的で歴史的な諸事実の問題把握にも拡大されている。とくに『産業と交易』全体の展開においては、マールの進化論的視角は広くヨーロッパ列強各国の「産業上の主導権」をめぐる「生存競争」の歴史のフォローとして具体化されている。フランスの「生産における個性と繊細さ」、ドイツにおける「産業に有用な科学技術」、そしてアメリカでの「多様な標準化」といった特性は、それぞれの地理的・自然のおよび民族的・国民性的な環境に適応していく歴史展開において、それぞれの産業組織的特徴を規定していた。そうした特徴がまた各時代の状況に適応したものと世界史的な「産業上の主導権」を担ってきた状況をマールは進化論的に示してみせていた。

マールは、19世紀後半以降のイギリス経済社会の現実把握とその打開を模索する中で、自らの理論展開を行っていた。その当初からすでに、イギリスの国際的経済力は凋落を示しており、それに伴う経済社会の変化は、株式会社の普及、巨大な独占的企業体の台頭を典型としていた<sup>17)</sup>。『原理』の続編とされる『産業と交易』ではそうした歴史的展開に焦点があてられている。こうした変化の中であって、彼は、人間の活力保持・向上を脅か

16) マールの進化経済学の特徴の集約的概念をこの「準地代」概念の成否に求め、ヴェブレンのマール批判と絡めてその限界を指摘しているものとして、『進化経済学とはなにか』八木紀一郎、第7章「進化経済学への学問的遺産」を参照。そこで紹介されている「マールを代表とする最近の経済学者は、動態的な発展過程の結果を受け入れることによって「進化的」な雰囲気身をまわっているが、その思考習慣においてはなお静態的な「正常」「自然」観から脱していない」(95ページ)とのヴェブレンによる否定的評価は、マールに内在するかぎりは疑問である。

す巨大組織化を憂え、組織の生産力展開との矛盾を、とくにイギリスの視点に立って打開しようとする議論を展開していた。

巨大組織化や独占化の弊害が著しくなっている状況においては、とくに「市場」の本来の機能を回復し、そこでの諸経済主体の活力の回復・保持が必要である。それゆえ、経済主体の自由な活動（企業・産業の自由＝「経済的自由」）確保のためには、特定・部分的な自由の制限、具体的には「破壊的独占」組織体の活動制限やその解体の必要性も生じているのである。マーシャルは市場における「建設的競争」さえ確保されれば、一般的な障害は社会有機体のもつ「自然治癒力」によって大抵のものは、回復するはずとの思考を堅持していく。とりわけ20世紀に入ってからの経済状況の変化が、イギリスを大きく揺さぶっていることを彼は強く意識し、イギリスの産業組織上の特性、アングロサクソン民族の性格、労働運動、社会主義これらの現実的諸展開を見据えながら、その打開において政府が担うべき新たな諸機能の問題<sup>17)</sup>を強調してもいた。

しかし、マーシャルの進化論的視座にもとづく進歩観自体は、イギリスの凋落にもかかわらず、いや逆に凋落しているからこそ、ますます強調されて、堅持されている。『産業と交易』最終章には次のような叙述がみられる。「現在の経済制度においては、規律は大いに『見えない手』によって自動的に強いられている。それはしばしばかなり厳しく、人間の努力によって厳格さを緩和する必要がしばしばある。しかし、もしもこの自動的な規律が取り除かれるならば、大きな問題だけでなく、些細な問題の弊害を抑制するためにも、全体にわたるような権力が発動されてしまう」。競争的市場の枠組みを信棒する一方で、「生活の状態が人間を作るのと同じ程度に、生活の状態を作るのは人間であり、人間自体は急速に変化することはできない」と繰り返し、「公衆の利益のために仕事をそれ自体楽しいものに変えること」「あらゆる階級の人々にたいして、浪費的支出によって自らの力を誇示するのではない方法によって、大きな努力を刺激すること」(IT, p. 660)の必要性をマーシャルは強調しつづけたのである。

## 5. 一応の整理

マーシャルは、進化論が提起した「環境に適したものが生存を続ける」との「適者生存の法則」の論理を、経済主体の環境への能動的働きかけの作用も含めて「適応と環境との相互展開」として受容した。そこでの焦点は、

人間集団や組織においては、環境に適応して生存を確保したものは、結局のところ、その外部環境にたいしても有益なものであるはずとの思考であった。この思考を下敷きとして『原理』や『産業と交易』は展開されていた。

「経済的自由」のもとに有機的な市場社会での「生存競争」の枠組みが、その力学的方法から把握されたうえで、「利他的犠牲的」特性をもつ主体の存在とその「活力」増大による「有機的成長」が展望された<sup>19)</sup>。マーシャルは、たえずイギリスにおける時代的な産業組織の特徴の問題点を考えながら、そこから人間活力⇒企業活力⇒産業活力⇒国家活力といった連鎖を見通していた。この各段階での主体（人間一般、労働者・企業家、企業組織、産業組織、民族、国家・政府）それぞれの問題とその主体にとっての環境への適応、これらの連続的重層的な構成をもって彼の経済学は組み立てられて、現実の歴史展開に接近していたのである。

確かにマーシャルの経済学は、個々の概念や分析ツールの提起においては、「新古典派」へと収斂されていくものも多い。しかし、彼は決して経済現象の分析ツールや数理的モデルをそれ自体として精緻化していくことを目的とはしていなかった。「代替の原理」の認識にも反映されていたように、彼にとって、経済学は、静態的均衡に依存して所与の前提における個々人の最適化行動を探究する類のものではなかった。自らの力学的方法から離れはじめる際の叙述が、またこれをよく示している。「均衡の静学的な理論は経済研究の序論にすぎない。またそれは、収穫増の傾向を示す産業の進歩と発展の研究にとっては、なお序論ですらない」(Principles, p. 461)。彼が力学的アプローチにおいて示した諸概念は、歴史進展との相関において理論展開するなかで、暫定的に活用されていたものである。こうした意味では、マーシャルに対する「新古典派」と「進化経済学」との綱引きの軍配は一応後者にあがるであろう。

ただし、マーシャルの経済学を支えている進化・進歩観はそれ自体としてみれば、「経済的進歩」と「人間的進歩」との相互循環構造による両進歩の並列のようでもある。この点、マーシャルがその現代版を目指していたJ.S.ミルが「経済的進歩」の行き着いた先に展開され始める別次元の「人間的進歩」を展望していた<sup>20)</sup>ことと比較するならば、マーシャルの進歩観は、「経済的進歩」に「人間的進歩」を解消ないしは埋没させてしまっていると云えるのかもしれない。この点で、マーシャルを現実的理論家であるにとらえるのか、それとも巧みな市場

17) 拙論「マーシャルの株式会社論」『福岡女学院大学紀要』第5号、1995年、同「マーシャル経済学における「独占」について——論理構成と歴史的位相——」同第6号、1996年、参照。

18) 拙論「マーシャル経済学における政府論——『産業と交易』を中心に——」『福岡女学院大学紀要』第7号、1997年、参照。

19) 従来、マーシャルは「生物学的方法」や「有機的成長」の具体的内容をほとんど展開せずにこの世を去った、との評価が多いのだが、その視座や内容についての基本的な骨格は、すでに示されている。「有機的成長」論の種はすでに、彼の残した著作に蒔かれ、発芽しているように思われる。

20) J.S.ミルの経済学体系については、さしあたり、中村廣治・高哲男編著『市場と反市場の経済思想——経済学史的再構成』（ミネルヴァ書房、2000年）第6章、諸泉俊介「J.S.ミル：市場とアソシエーション」参照。



経済社会擁護者ととらえるのか、ここでまた議論は分かれるのであろうか<sup>21)</sup>。

[付記]

本論の作成過程で、進化経済学会九州部会および経済学史学会西南部会で報告の機会を得た。両学会でのご批判、ご教授にお礼申し上げます。

---

21) マーシャル経済学の全体的特徴の概要に関しては、前掲書第8章、拙論「マーシャル：有機的成長の経済学」参照。